

ヴヴェージェンスキー

イワーノフ家のクリスマス

登場人物

| | | |
|---------------|-------|--------|
| ペーチャ・ペローフ | 1歳の子 | |
| ニーナ・セローワ | 8歳の子 | |
| ワーリャ・ペトローワ | 17歳の子 | 子供たち |
| ヴォロージャ・コマローフ | 25歳の子 | あるいは単に |
| ソーニャ・オストローワ | 32歳の子 | 悪魔 |
| ミーシャ・ペストローフ | 76歳の子 | |
| ドゥーニャ・シュストローワ | 82歳の子 | |

プズィリョーフお母さん

プズィリョーフお父さん

犬のヴェーラ

棺桶屋

小間使い、コック、兵士、ラテン語とギリシャ語の教師。

90年代の出来事。

第1幕

第一場

第一場、風呂が描かれている。クリスマスの前日、子供たちが入浴している。箆笥もある。ドアの右手ではコックたちが雌鶏と子豚を屠っている。子守り女、子守り女、子守り女たちが子供たちの体を洗ってやっている。子供たちは皆同じ大きな風呂に入っているが、1歳の男の子ペーチャ・ペローフは、ドアの真向かいに置かれた金盥で水を浴びている。ドアの左手の壁には時計がかかっている。夜の9時を指している。

1歳の子ペーチャ・ペローフ　クリスマスは来る？　来るよ。突然終わるよ。突然ぼくは死ぬよ。

子守り女（スカンクみたいに陰険な女）　体を洗いなさい、ペーチャ・ペローフ。耳と首に石鹸を付けなさい。あんたまだ喋れないはずでしょ。

ペーチャ・ペローフ ぼく考えて話せるんだよ。泣けるんだよ。笑えるんだよ。何がしたいの？

ワーリャ・ペトロワ (17歳の女の子) ヴォロージャ、私の背中をこすって。背中に苔でも生えたんじゃないかしら。どう思う？

ヴォロージャ・コマローフ (25歳の男の子) ぼくはどうも思わない。お腹を火傷しちゃったよ。

ミーシャ・ペストローフ (76歳の男の子) 今にシミができるよ。それはどんな手段を使っても絶対に消すことができないんだ。

ソーニャ・オストローフ (32歳の女の子) ミーシャ、あんたはいつも嘘ばかり言うのね。もっとよく見て、私のおっぱいはどう。

ドゥーニャ・シュストローフ (82歳の女の子) また自慢してるわ。お尻を自慢したかと思えば、今度はおっぱい。恥を知りなさい。

ソーニャ・オストローフ (32歳の女の子。悲しくて下を向く。大人の小ロシア人のように) 侮辱だわ。この間抜け、頭の湧いた売女め。

子守り女 (武器みたいな斧を振り上げる) ソーニャ、もしあんたが悪口を言うようだったらお父様とお母様にご報告するわよ、そしてこの斧でぶった切ってやるんだから。

ペーチャ・ペローフ (1歳の男の子) 自分の皮膚が引き裂かれ、血が飛び散るのを感じるの、ほんの一瞬のことだよ。その後何を感じるかは分からないけどね。

ニーナ・セローフ (8歳の女の子) ソーニャちゃん、この子守り女は気遣いか、あるいは犯罪者なのよ。何だってやるわ。どうしてこんなのを雇ったのかしら。

ミーシャ・ペストローフ (76歳の男の子) みんな、喧嘩はやめるんだ。クリスマスまで生きられないぞ。お父さんとお母さんはロウソクとキャンディと火を点けるためのマッチを買ってるんだよ。

ソーニャ・オストローフ (32歳の女の子) ロウソクは要らないわ。私には指があるもの。

ワーリャ・ペトロワ (17歳の女の子) ソーニャ、言い過ぎよ。言い過ぎ。それより体をもっと綺麗に洗った方がいいわ。

ヴォロージャ・コマローフ (25歳の男の子) 女の子は男の子よりたくさん洗わないといけないんだよ。そうじゃないとぞっとすることになるよ。ぼくはそう思うな。

ミーシャ・ペストローフ (76歳の男の子) やれやれ、お前たちは下卑たことを言うんだな。明日はクリスマス、皆でいっぱい楽しもうよ。

ペーチャ・ペローフ (1歳の男の子) お客たち全員が順番にぼく一人だけ抱っこしてくんだよ、もったいぶって馬鹿みたいな顔しなくちゃ。まるで何も理解できてないといったふうにね。お見通しだよ。

ソーニャ・オストローフ (32歳の女の子) 私が広間に出て行くでしょ、モミの木が点灯したら、スカートをたくし上げて皆に隅々まで見せてやるんだから。

子守り女(かっとなる) 駄目よ、見せちゃ駄目。お前には見せるものなんて何もないわ。

お前はまだ小さいんだから。

ソーニャ・オストローワ(32歳の女の子) いや、見せるわ。でも私のが小さいってのは、あんた本当のこと言ったわ。そっちの方がいいのよ。あんたみたいんじゃないのよ。

子守り女(斧を掴んでソーニャの首を切り落とす) お前は死に値するわ。

子供たちが叫ぶ。人殺し、あいつは人殺した。お風呂を中止して。

コックたちが雌鶏と子豚を屠る手を止める。

胴体から二歩のところ、切り離されて血まみれの望みを絶たれた頭が床に転がっている。ドアの向こうで犬のヴェーラが吠えている。警官が入ってくる。

警官 ご両親はどちらへ？

子供たち(コーラス) 劇場です。

警官 お出かけになってから随分経っていますか？

子供たち(コーラス) 経っていますが永遠という訳じゃありません。

警官 何をご覧になっているのでしょうか、
バレエ、それとも悲劇？

子供たち(コーラス) バレエのはずです。

私たちはママが好きです。

警官 お会いできてうれしいです
教養ある方々に。

子供たち(コーラス) 皆さんはいつも底の高い靴を履いてらっしゃるんですか？

警官 いつもです。ご遺体を拝見させていただきます
それと切り離された頭部を。
ここに人間が虚しく横たわっています、
しかも損なわれた人間が。
ここで何があったのですか？

子供たち(コーラス) 子守り女が斧で

私たちの姉妹を斬り殺したんです。

警官 その人殺しはどこにいるんですか？

子守り女 あなたの前にいますよ。

私を縛って下さい。

私を寝て下さい。¹
私を処刑して下さい。
警官 おい召使、火だ。
召使 私たちは盛んに泣いています。
火は盛んに燃えています。
子守り女（泣く） 馬を裁いて下さい、
私にはお慈悲をお与え下さい。
警官 なぜ馬を裁かにならんのだ、
もしこの流血の咎が馬にないんだったらな。
そして我々には見つけられんさ
咎のある馬など。

子守り女 私は気違いです。

警官 さあ服を着るんだ。あっちで取り調べが行われる。専門家の鑑定を受けるんだ。彼女に手錠を嵌めるか鎖で縛るかして下さい。

一人のコック 子守り女さんよ、両手を鎖で縛ってやるよ。

もう一人のコック 人殺しめ。

警官 こら静かに、コックさん。さあ行った行った。さようなら、子供たち。

ドアを叩く音がする。プズィリョーフの父親と母親が飛び込んでくる。二人とも悲しみのあまり我を忘れていて。痛ましい声で叫び、罵り、モ〜と泣いている。

ドアの左手の壁には時計がかかっている、夜の12時を指している。

第一場 終わり

第二場

同じ夜、森の中。荷籠で運び出したいほど雪が積もっている。きっと運び出されるだろう。森では樵（きこり）たちがモミの木を伐っている。明日は多くのロシア人とユダヤ人の家庭でクリスマスツリーが飾られるのだ。² 他の樵たちから一人離れているのはフォードル。彼

¹ ヴヴェジェンスキーは文法的規則を破壊することがある。ここでは、「寝ている лежать」という自動詞を他動詞として用いている。そうされることによって、また文脈的にも、発話はノンセンスなものになっている。

² 西欧とは異なり、ロシアのクリスマスは1月7日に祝われる。他方、多くのユダヤ人の家庭ではクリスマスを祝う習慣それ自体がない。代わりにハヌカーという行事があるものの、ツリーを飾るのは決して一般的ではない。

は殺人を犯した子守り女の婚約者である。彼がそのことについて何を知っていようか？
まだ何も知らない。プズィリョーフ家のクリスマスツリーのために巧みにモミの木を伐っ
ている。獣たちは皆自分の巣穴に隠れている。樵たちは讃美歌を合唱する。ドアの左手にか
かっている例の時計は例によって9時を指している。

樵たち 森の中は何と素敵なのだろう、
雪がキラリと煌いている。
車輪に祈りを捧げよう、
それは何にも増して丸いのだ。

馬には木々が
音も立てずに載っている。
櫓では脇芽が
天使のようにきしんでいる。³

明日になればクリスマス、
俺らは恥ずべき男たち
おめでとう
酒をたくさん呑もうじゃないか。

玉座からご覧遊ばす神様は
優しく微笑まれながら
静かに溜息を洩らされる、
人民よ、お前たちは我が孤児なのだ。

フョードル（物思いに沈んでいる） いや、俺がいま言おうとしていることは、皆には分
かんねえ。俺には許嫁がいる。プズィリョーフ家の大家族の中で子守りとして働いて
いる。すごく綺麗だよ。俺はあの子が大好きなんだ。俺たちはもう夫婦（めおと）み
たいに暮らしてる。

³ 「天使のように」という奇妙な比喩が用いられている理由は、その音にある。「天使の
ように по-ангельски [po-angel'ski]」という語句は「脇芽 пасынки [pasynki]」という語句と
音声的に近似している。ヴヴェジェンスキーの詩においては、互いに意味の異なる類音語
（類音語接近）がしばしば用いられており、これによって文脈上の意味が攪乱される。

フォードルの発言に興味をそそられたということ、樵たちは身振り手振りで自分なりに彼に伝える。このとき、樵たちは話せないということが明らかになる。彼らはたった今歌ったばかりだが、それは偶然に過ぎない。人生にはまあることだ。

フォードル ただ、あの子はひどく怒りっぽいなよな、俺の許嫁は。でもしょうがない、仕事が大変なのさ。大家族だ。子供がたくさんいる。しょうがないさ。
樵 フルーツ。

(この男は口を利いたが、頓珍漢な発言だ。だからこれは勘定に入れない。彼の仲間たちもいつも頓珍漢なことばかり喋っている。)

二人目の樵 黄疸。

フォードル あの子を娶ったら、寂しくなったり嫌になったりすることなんて絶対ないんだろうな。なぜかって、俺たちは強く愛し合っているからだ。おれたちの魂は一つみたいなもんなんだ。

三人目の樵 ズボン吊り

フォードル よし、もう木を運び出して、夜中あの子を訪ねに行こう。子供たちを皆お風呂に入れて、今は俺を待っている頃さ。しょうがねえな。

フォードルと樵たちは櫓に乗って森を出てゆく。

獣たちが現れる。不思議な動物のキリン、ビーバーみたいなオオカミ、百獣の王ライオン、そして豚の子供。

キリン 時計は進む。

オオカミ 雌羊の群れのように。

ライオン 雄牛の群れのように。

豚の子供 チョウザメの軟骨のように。

キリン 星は輝く。

オオカミ 雌羊の血潮のように。

ライオン 雄牛の血潮のように。

豚の子供たち 乳母のお乳のように。

キリン 川は流れる。

オオカミ 雌羊の言葉のように。

ライオン 雄牛の言葉のように。

豚の子供たち 鮭の女神のように。

キリン 我らが死は何処？

オオカミ 雌羊の魂の中に。

ライオン 雄牛の魂の中に。

豚の子供たち 広々とした器の中に。

キリン ありがとうございます。授業はお終いです。

獣たち——不思議な動物のキリン、ビーバーみたいなオオカミ、百獣の王ライオン、そして豚の子供は、もうまるで生活の中へ戻ってゆくように退場。森だけが残される。ドアの左手の時計は夜中の12時を指している。

第二場 終わり

第三場

夜中。棺。川を流れてゆくロウソク。プズィリョーフお父さん。眼鏡。顎鬚。涎。涙。プズィリョーフお母さん。婦人物の下着をつけている。美人だ。胸がある。棺の中でソーニャ・オストロワがうつ伏せになっている。血の気がない。切断された頭は、かつて自分の胴体だったところのものの上に置かれた枕に載せられている。ドアの左手に時計がかかっている。夜中の2時を指している。

プズィリョーフお父さん(泣く) ああ私のソーニャ、どうしてこんなことに。どうして。

朝にはまだお前はボール遊びをして、生き生きと駆け回っていたのに。

プズィリョーフお母さん ソーニャちゃん。ソーニャちゃん。ソーニャちゃん。ソーニャちゃん。ソーニャちゃん。ソーニャちゃん。ソーニャちゃん。

プズィリョーフお父さん(泣く) よりによって私たちは劇場へなんぞ行って、そこで毛深い太鼓腹のバレリーナ共が出ている下らんバレエを観てしまった。今でも覚えているが、連中の一人が飛び跳ねて目を輝かせながら私に微笑みかけた。だがお前が必要だとは思えなかった。私には子供たちや妻がいるし、金があるからだ。こうして楽しませてもらったよ。それから私たちは劇場を出た。辻馬車を呼んで、こう言った。

ソーニャ、私たちを早く家まで連れて行っておくれ。何だか胸騒ぎがするんだ。

プズィリョーフお母さん(欠伸する) おお、無慈悲な神よ、無慈悲な神よ、御身は私たちを何の咎で罰せられるのでしょうか。

プズィリョーフお父さん(鼻をかむ) 私たちはまるで火みたいなものでした。御身は私たちを消してお仕舞いになるのです。

プズィリョーフお母さん(白粉をつける) 子供たちにモミの木を飾ってあげたかったわ。

プズィリョーフお父さん(キスを交わす) 飾ろうじゃないか、飾ろう。是が非でも。

プズィリョーフお母さん（服を脱ぐ） ああ、クリスマスが来るわ。クリスマスにはモミの木よ。

プズィリョーフお父さん（想像を逞しくする） お前は美人だし、子供たちはこんなにも可愛い。

プズィリョーフお母さん（彼に凭れかかる） まあ、なんでこんなにソファァが軋むのかしら。すごいわ。

プズィリョーフお父さん（事を済ませ、泣く） 主よ、娘が亡くなってしまいました。私たちはもう獣も同然です。

プズィリョーフお母さん（泣く） 亡くなったんじゃないわ、亡くなったんじゃないわ、大事なのはそこよ。あの子は殺されたのよ。

子守り女が1歳のペーチャ・ペローフを腕に抱っこしたまま入ってくる。

子守り女 坊やが起きてしまいました。何だか気持ちが落ち着かないみたいです。顔をしかめてるわ。何を見ても不機嫌そう。

プズィリョーフお母さん おやすみ、ペーチャちゃん、おやすみ。私たちがあなたを見守っていてあげるわ。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） ソーニャはどうしたの。ずっと死んだままなの？

プズィリョーフお父さん（溜息をつく） そうだよ、あの子は死んでるんだ。殺されたんだ。死んだままなんだよ。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） そうだと思ったよ。で、モミの木は来るの？

プズィリョーフお母さん 来るわ。きっとよ。今あなたたち子供は皆何をしてるの？

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） ぼくたち子供は皆寝てるよ。ぼくも寝るよ。（寝る。）

子守り女は彼を抱き抱えたまま両親の元へゆく。二人は男の子に十字を切ってやり、キスする。

子守り女は彼を連れて出てゆく。

プズィリョーフお父さん（妻に） お前は棺のところにしばらく一人でいなさい。すぐ戻る。モミの木が運ばれて来ていないか見に行ってくるから。（客間から飛び出す。手をこすり合わせながらすぐに戻ってくる。） そういえば、ロウソクも持ってこないとな。そうしないとこいつらはもう完全にレテ河⁴へ漕ぎ出してしまうところだった。（棺と妻に深々とお辞儀をして、つま先立ちで退場。）

⁴ 黄泉の国にあるという忘却の河。ロウソクの存在を忘れていたことを冗談めかして言っていると思われる。

プズィリョーフお母さん（一人残される）　ねえソーニャちゃん、私たちが階段を昇って
いたとき、私の上にはずっと黒いカラスが飛んでいたわ。自分の心臓が憂いで締め付
けられるように感じたものよ。私たちが部屋に入ったとき、召使のステパン・ニコラ
ーエフが、彼女は殺されている、彼女は殺されていると言ったとき——私は絶望の悲
鳴なんて上げなかったわ。こうしてると怖くなっちゃった。とても。すごく気分が悪
いわ。

ソーニャ・オストローワ（かつての32歳の女の子）　打ち棄てられた鉄道の標柱みたい
に横たわっている。母親が彼女に話しかける声が聞こえているだろうか？　いやどうして
そんなことがありえようか。彼女は完全に死んでいる。殺されたのだ。

ドアがバタンと開く。プズィリョーフお父さんが入ってくる。それに続いてフォードル。
それに続いて樵たち。彼らはモミの木を運んでくる。皆棺を目にして、帽子を脱ぐ。帽子を
被っていない、このことが何も理解できていないモミの木を除いて。

プズィリョーフお父さん　静かにするんだ、兄弟、静かに。ここで私の娘が、女の子が最
期の瞬間を迎えようとしているんだ。もっとも、（すずり泣く）もはや最期でさえな
く、あの子は頭を切断されてしまったんだが。

フォードル　あなたは俺たちに悲しみを届けました。でも俺たちはあなたに喜びをお届け
します。ほら、モミの木を届けるんだ。

一人目の樵　フルーツ。

二人目の樵　ギリシャ人への手紙。

三人目の樵　人が溺れている。助けてあげなさい。

全員退場する。かつて32歳の女の子だったソーニャ・オストローワが一人残される。彼
女の頭と胴体が残される。

頭　胴体さん、あなた全部聞こえてたの？

胴体　全然聞こえなかったよ、頭さん。耳がないからね。でも全部感じてたよ。

第三場と第1幕、終わり。

ドアの左手の時計は夜中の3時を指している。

第2幕 第四場

警察分署。夜中。封蝋。警官。ドアの左手の時計は夜中の12時を指している。書記が座っている。巡査が座っている。

書記 封蝋の風貌は胸あり候。ペンには二個の変じゃないペンチ。⁵

巡査 退屈だよ、書記さん。

丸一日ぼんやり哨所に突っ立っていた。

凍えちまったよ。風邪を引いた。全部嫌になっちまった、

太陽の国エジプトにあるエジプトの

ピラミッドとだらだら降る雨。

俺を慰めてくれませんか。

書記 お巡りさん、どうやら君は気がふれてしまったようだな。なぜ私が君を慰めにゃならんのだ。私は君の上司だぞ。

巡査 確かに、

薬局、居酒屋、売春宿が

いつか俺を狂わせちまうだろう。

薬局に中毒患者を連れて行くよりも、

図書館にこもって、

マルクスの断片を読み漁って、

朝はウォッカじゃなくてクリームを飲んでいたいもんだな。

書記 あの酔っ払いはどうしたんだ。何だあいつは、まだずっとふらついているのか？

巡査 ほうらこの振り子みたいにふらついていますよ、

その上じゃ銀河もふらついていますよ。

そうだ、どれだけいるんだろう、海に働く人びとや、

悲惨な人びと、それに農奴たちは。⁶

警察分署長と憲兵たちが入ってくる。

⁵ 原文は「У сургуча всегда грудь горечая. У пера два прекрасных бедра」であり、直訳すれば「封蝋の胸はいつも燃えている。ペンには二本の素晴らしい太股」となる。しかし、原文には近似した音の響きの戯れがあるのは明らかであり、これを逐語訳しても、単に無意味なだけの言い回しにしかならない。そこで、拙訳では意味よりも音を重視した。

⁶ ヴィクトル・ユーゴーの小説のタイトルが口口にされている。『海に働く人びと』『悲惨な人びと (レ・ミゼラブル)』。

警察分署長 全員起立。全員気を付け。神に祈るべし。いまここに罪人が連行されてくる。

兵士、召使、コック、ラテン語とギリシャ語の教師がソーニャ・オストロワを殺害した子守り女を引っ張ってくる。

警察分署長 女をここに。(子守り女に向かって) 牢屋に入っていないさい。

子守り女 私の手は血に塗れています。私の歯は血に塗れています。神は私をお見捨てになりました。私は気違いです。あの子はいま何かしているのかしら。

警察分署長 子守り女、お前は誰のことを言っているのかね。なあ、おかしいことを言うてはいけないよ。ウォッカを一杯くれ。あの子というのは誰だね？

子守り女 私が斬り殺したソーニャ・オストロワです。あの子はいま何かを考えているのかしら。寒いわ。頭がお腹みたいに痛い。

書記 まだ若いのにな。まだ悪くない。まだいける。まだ星みたいだ。まだ弦みたいだ。まだ魂みたいだ。

巡査 (子守り女に)

あなたのお気持ちを想像するに、
あなたは女の子を斧で殺しましたね。
あなたは今や心に苦悩を抱えているでしょう
筆舌に尽くしがたい苦悩を。

警察分署長 さあ子守り女さん、どんなお気持ちですか。人殺しになって気持ちは晴れましたか？

子守り女 いいえ。苦しいです。

警察分署長 あなたは処刑されるんですからね。誓ってあなたは処刑されますよ。

子守り女 手を叩きます。足を踏み鳴らします。私の頭の中にはあの子の頭があるわ。私はソーニャ・オストロワ——子守り女が私を斬殺したのよ。フェージャ…フョードル、助けて。

巡査 かつて厳寒の日、俺は哨所に立っていたのを覚えている。

人々がぐるぐる行き交い、足の速い動物たちが走り回っていた。

ギリシャ人の騎士団が影みたいに大通りを駆け抜けて行った。

俺は大きな笛を吹いて、屋敷番たちを呼び寄せた。

長いこと俺たちは皆立ち尽くしたまま、望遠鏡を覗いていた。

地面に耳をくっつけて、蹄の音に耳をすませていた。

悲しいかな、俺たちは徒に、虚しく、探し求めていたのだ、騎士団を。

そのあと静かに涙をこぼし、俺たちはそれぞれ家路に着いた。

警察分署長 何のためにお前はそんな話を始めたんだ。お前に聞いているんだ。この馬鹿者！ 木端役人め。職務を何と心得るか。

巡査 わたくしは殺人者の気をその思考の暗がりから逸らそうとしたのであります。
書記 ドアを叩いている。看護師です。彼女をあなた方の精神病院に引き取って下さい。

ドアをノックして、看護師たちが入ってくる。

看護師 誰を引き取ればよいでしょうか——このナポレオンですか？⁷

退場。ドアの左手の時計は夜中の4時を指している。

第四場 終わり

第五場

精神病院。防護壁の前に医師が立って、鏡に狙いをつけている。辺りには花と絵が飾られ、絨毯が敷かれている。ドアの左手の時計は夜中の4時を指している。

医師 主よ、何と恐ろしいことでしょうか。周りには異常者ばかり。彼らは私に付きま
って離れません。私の眠りを蝕んでくるのです。私を射ち殺したいと思っているので
す。ほら、連中の一人がそろりそろりと近寄ってきた、私に狙いを定めている。狙い
を定める、でも自分では撃たない、狙いを定める、でも自分では撃たない。撃たない、
撃たない、撃たない、でも狙いを定める。結局私が撃つことになるでしょう。

撃つ。鏡が粉々に砕ける。石のように無表情な看護師が入ってくる。

看護師 誰が発砲したのですか？

医師 知らんよ。どうやら、鏡か。君たちは何人いるんだね？

看護師 大勢です。⁸

⁷ 民間に伝わる話の中では、狂人は自らをナポレオンとしばしば同一視する。なお、ゴーゴリ『狂人日記』においては、語り手は自らをスペインの国王と同一視している。

⁸ 本作には複数性のモチーフと聖書のモチーフがちりばめられており、この台詞にはその両方が凝縮されている。前者について言えば、戯曲冒頭のト書き「子守り女、子守り女、子守り女たち」という反復が既に複数性の不穏さを暗示しているが、この第五場においてはその不穏さは人格の複数性に及んでいる。ここでは、前注で示したような、アイデンティティの分裂というモチーフが顕著である。また後者について言えば、第三場終わり近くの樵の台詞「ギリシャ人への手紙」が明らかに聖書の「ローマ人への手紙」を連想させるように、この戯曲には聖書への仄めかしが見られる。「大勢です *Нас много*」という台詞は、「マルコによる福音書」第5章第9節の「名はレギオン。大勢だから *нас много*」と

医師 ほう、そうなのか。それはそうと馬鹿らしいところがちょっと痛むな。そこに誰か運び込まれて来たぞ。

看護師 人殺しの子守り女が警察分署から連れて来られたのです。

医師 その女は石炭みたいに真っ黒か？

看護師 私が全て承知しているわけではないことはご存知でしょうに。

医師 もちろんだ。この絨毯は気に食わんな。(発砲する。看護師が死んだように倒れる。) どうしてお前が倒れるんだ。私が撃ったのはお前ではなくて、絨毯だぞ。

看護師 (起き上がる) 私が絨毯のような気がしたのです。勘違いでした。その子守り女は自分のことを気違いだと言っています。

医師 その女がそう言っても——私たちはそうは言わん。私たちは徒にそんなことを言わない。なあ知っているだろう、この木々の全て、地中のミミズ、音もない暗雲、それらを含んだこの庭園を私はそっくり所有しているのだ。ほらここ、ここ、ええと、何て言うんだったかな (手のひらを指す)。

看護師 ブドウ。

医師 違う。

看護師 壁。

医師 違う。手のひら。じゃあ、その子守り女を中に入れろ。

子守り女が入ってくる。

子守り女 私は気違いです。赤ん坊を殺してしまいました。

医師 子供を殺してはいけませんね。あなたは健康ですよ。

子守り女 わざとじゃないんです。私は気違いです。処刑されてしまうかもしれないんです。

医師 あなたは健康ですね。血色がいい。三つまで教えてみなさい。

子守り女 できません。

看護師 一、二、三。

医師 ほらご覧なさい、自分ではできないと仰っていますがね。あなたは鉄みたいに頑健ですよ。

子守り女 こう言っても無駄でしょうが。数えたのは私ではありません、あなたのところの看護師さんです。

医師 今や真相を究明するのは困難ですね。私の言うことが聞こえていますか？

看護師 聞こえています。私は子守り女です、全て聞こえていなければなりません。

いう言葉と完全に一致する。レギオンとは悪霊のことであり、イエスによって人の体から追い出され、豚の中に入る。そして豚の群れは湖の中になだれ込んで溺れ死ぬ。ちなみにこの挿話をエピグラフに掲げたのがドストエフスキー『悪霊』である。

子守り女 主よ、私の人生はお終いだわ。もうすぐ処刑されてしまう。

医師 彼女を連れて行きなさい、それよりモミの木を運び入れた方がいいでしょう。確かにその方がいい。ちょっとは陽気になるでしょう。当直にはほとほとうんざりだ。おやすみなさい。

広間を出発した小舟に乗った病人たちがオールを床にぶつけながら漕いでいる。

おはよう、患者の皆さん、どちらへ？

気遣いたち キノコやイチゴを。

医師 ああ、なるほど。

看護師 私もあなた方と一緒に水浴びをしますよ。

医師 子守り女、絞首台へ行け。お前は健康だ。紅顔で血色がいい。

ドアの左手の時計は朝の6時を指している。

第5場 終わり

第六場

廊下。そちらにドア。あちらにドア。ここにもドア。暗い。ソーニャ・オストロワを殺害した子守り女の婚約者、樵のフョードルが燕尾服に身を包み、手にはキャンディーを握りしめ、廊下を歩いている。これといった理由もないのに彼は目に包帯を巻いている。ドアの左手の時計は朝の5時を指している。

フョードル（ドアの中に入る） 寝てる？

ある女中の声 寝てるけど、入っていいわよ。

フョードル つまり君はベッドの中というわけだ。ご覧よ、ご馳走を用意してきたよ。

女中 あんた一体どこから来たのよ。

フョードル 風呂だよ。ブラシで馬みたいに自分の体をごしごし洗ってたのさ。そこでふざけて目に包帯を巻かれたんだ。さあ、燕尾服を脱ごうかな。

女中 脱いでちょうだい。私の上に来て。

フョードル 行くよ行く。慌てちゃいけないぜ。ご馳走を食いなよ。

女中 いただくわ。あんたは自分の事をしなさいな。うちは明日クリスマスよ。

フョードル（彼女の上になる） 知ってる、知ってるよ。

女中 うちの女の子が殺されたの。

フォードル 知ってる。聞いたよ。

女中 もう棺の中で寝てるわ。

フォードル 知ってる、知ってるよ。

女中 奥様が泣かれてたわ。旦那様も。

フォードル (彼女の元から起き上がる) お前とじゃつまらん。俺の許嫁じゃないからな。

女中 ふん、それが何だって言うの。

フォードル お前と俺とじゃ魂が違うんだ。俺はもうすぐケシの花みたいに消えることにするよ。

女中 あんたなんかもういいわ。でも、もう一回したくない？

フォードル いや、いや、ひどく憂鬱なんだ。俺はもうすぐ喜びみたいに消えることにするよ。

女中 あんたいま何考えてるの？

フォードル お前の後では全世界は俺にとって味気無いものになっちまったってことさ。机は塩と空と壁と窓と空と森を失くしちゃった。⁹ 俺はもうすぐ夜みたいに消えることにするよ。

女中 失礼な人ね。お仕置きしてやるわ。私を見て。あんたが吃驚することを話したげる。

フォードル 話してくれ。お前はヒキガエルだ。

女中 あんたの許嫁が女の子を殺したのよ。あんた殺された女の子見た？ あんたの許嫁は女の子の頭を切り落としたのよ。

フォードル (ゲロゲロ)

女中 (せせら笑う) ソーニャ・オストローワって女の子、分かる？ あの女が殺したのはあの子よ。

フォードル (ニャーオ)

女中 あんた何が悲しいの？

フォードル (鳥の声で歌う)

女中 へえ、あんたあの女を愛してたのね。でもどうして。何のために。あんたはあんた自身なのに。

⁹ 原文通りに訳したが、かなり不可解な一文である。ここに何らかのメタファーを読み取ることは可能かもしれないが、そもそもメタファーという形式を形骸化する試みとも言えるかもしれない。ヴヴェジェンスキーは論理システム(仮定-結論など)を用いることで、むしろ論証されるべき中味を無化することがある。「もし私が生まれたのなら／私も生まれたのである／もし私が頭なら／私も頭である」といった、「仮定-結論」という論証手続にしたがったトートロジカルで無意味な表現が一例だ。それを踏まえると、ここでは、メタファーというシステムを用いることで、暗に示されるべき対象の不在を浮き立たせ、そのシステムを形骸化させ無意味な空間を出現させていると言える。内容を伴わない形式(システム)は無意味で、不気味でさえある。ヴヴェジェンスキーの詩学を詳細に分析したドゥルースキンは、これを「メタファーを異化することによって生じた無意味」とみなしている。

フョードル いや、俺は俺じゃない。

女中 聞かせてよ、聞かせて、私はあんたをこんなに信じてるのよ。

フョードル 嘘じゃないんだ。

女中 もう出て行って、私寝たいの。明日はクリスマスよ。

フョードル 知ってる、知ってるよ。

女中 あんたまた何を言ってるの。もう私とは切れたじゃない。

フョードル ただあんまり悲しくて、言葉が口を衝いて出るのさ。俺には後まだ何が残されているんだろうか。

女中 悲しむこと、悲しむこと、悲しむこと。どっちにしたってあんたを救ってくれるものなんて何もないわ。

フョードル どっちにしたって俺を救ってくれるものなんて何もない。お前は正しいよ。

女中 さもなけりゃ勉強してみることね。勉強、勉強。

フョードル やってみるよ。ラテン語を勉強しよう。先生になろう。じゃあな。

女中 じゃあね。

フョードルが消える。女中は寝る。ドアの左手の時計は朝の6時を指している。

第六場 終わり

第3幕

第七場

テーブル。テーブルの上には棺。棺の中にはソーニャ・オストロワ。ソーニャ・オストロワの中には心臓。心臓の中には凝固した血。血の中には赤血球と白血球。もちろん屍毒も。夜が明けているのが分かる。犬のヴェーラが尻尾を巻いて、棺の周りをぐるぐる回っている。ドアの左手の時計は朝の8時を指している。

犬のヴェーラ 棺の周りをぐるぐる回る。

周囲に二つのものが見えるわ。

この死——それは試練。

貧者はパンに祈る。

愚者は空に祈る。

司祭はここで儀式を執り行う。

遺体は硬直している。
ハムのために歯を持っていた 私。
ドルネシアは死んだ。¹⁰

至る所に血痕。
暗い気質って何だろう。
子守り女さん、いいえあなたは間違っている。

生は飾られながら与えられる。
死は脅されながら与えられる。
一体何のために破壊されるの

一番大切な動脈と
命知らずのバクテリアは。
普通の子守り女みたいに。

フォードルは尻を撫でていただろうに
毎朝いつもお前のを、
今度はお前自身が死体になるのだ。

1歳の男の子ペーチャ・ペローフが入ってきて、よちよち歩く。

ペーチャ・ペローフ ぼくが一番年下だけど——皆より早く目が覚める。今でも覚えてるけど、二年前ぼくにはまだ何一つ記憶がなかった。犬が詩を詠んでいるのが聞こえるぞ。こんなにひっそり泣くんだな。

犬のヴェーラ 広間の中は何と寒いんでしょう。

ペーチャ、あなたは何て言ったの。

ペーチャ・ペローフ (1歳の男の子) ぼくが何を言うことができるっていうの。ぼくができるのはただ何かを伝えることだけだよ。

犬のヴェーラ 私は吠える、吠える、吠える、吠える、
生きてるソーニャを見たくて。

ペーチャ・ペローフ (1歳の男の子) あの子の上品さは普通じゃなかった。で、今ではあの子を見るのが怖いんだ。

犬のヴェーラ あなた驚かないの、私が吠える代わりに喋っていること。

¹⁰ ドルネシアは、セルバンテス『ドン・キホーテ』の登場人物。ドン・キホーテは平凡な女を「ドルネシア」と名付け、理想化し、美化する。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） ぼくの歳で驚くことなんて何があるのさ。安心して。

犬のヴェーラ お水を一杯くださいな。私にはあんまりだわ。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） 気にしないで。ぼくの始まったばかりの人生では当たり前のことなのさ。まだそういう概念がないんだよ。

犬のヴェーラ この不幸なソーニャ・オストローフはふしだらだった。でも私は彼女のものだった。私に全部教えてちょうだい。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） パパ。ママ。おじちゃん。おばちゃん。子守りのお姉ちゃん。

犬のヴェーラ 何を言っているの。しっかりして。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） ぼくは今1歳なんだよ。忘れないで。パパ。ママ。おじちゃん。おばちゃん。火。雲。リンゴ。石。忘れないで。

ズボンを穿いたまま子守り女の手を抱かれて退場。

犬のヴェーラ（思い出す） 彼は本当にまだ小さくて幼いのね。

ミーシャ・ペストローフとドゥーニャ・シュストローフが手を繋いでもぐもぐ言いながら入ってくる。

ミーシャ・ペストローフ（76歳の男の子） おめでとう。今日はクリスマスだよ。もうすぐお手付きが来るよ。

ドゥーニャ・シュストローフ（82歳の女の子） お手付きじゃないわ、キツツキよ。いえキツツキじゃないわ、モミの木よ。おめでとう。おめでとう。で、ソーニャはどうしたの、寝てるの？

犬のヴェーラ いいえ、彼女はおしっこしてるの。

ドアの左手の時計は朝の9時を指している。

第七場 終わり

第八場

第八場、法廷が描かれている。年寄りに混じって判事が——かつらを被って審議。シラミが飛び跳ねている。強いナフタリンの臭いがする。憲兵たちが膨れている。ドアの左手の時計は朝の8時を指している。

裁判官（死にかけている） クリスマスを待たずに——私は死んだ。

（別の裁判官が速やかに彼と交代する）。

別の裁判官 具合が悪い、具合が悪い。助けて下さい。

（死んでゆく。別の裁判官が速やかに彼と交代する）。

全員（コーラス） 我々は二つの死に恐れ戦いている。
滅多にないことだ——勝手に裁判して下さい。

他の全員（順番に）

裁こう。
これから
裁こう
そして起こそう
人々を。
載せられる
裁判と
容れ物が
お皿に。
載せられる
食器に
裁判官が。

（コズローフとオスローフの事件の審理が始まる）。

書記官（調書を読む）

冬の夜コズローフは
山羊（コズローフ）に水浴びさせるため川へ向かっていた。
見るとオスローフがこちらに歩いてくる、
驢馬（オスローフ）を川の方から引いてくる。

オスローフはコズローフに話しかける。
お前は誓いの言葉を信じているのか？
山羊に水浴びさせても無駄ではないか、

お前は祈祷書を読んだのか？

コズローフがオスローフに言う。
詩篇を読めよ、祈祷書には
関わるな。
黙っている。

オスローフがコズローフに言う。
今はちょうど詩篇がぴったりだ。
連れて歩くのは荒地の方にしろ、コズローフ
詩篇を読みながら山羊を飼えよ。

コズローフがオスローフに言う。
俺はお喋りな野郎は信用しない。
今日はお前に腹を立ててるぜ
見てみろ、俺の山羊を。

オスローフがコズローフに答えて言う。
柳の枝をもぎ取って
問答無用で
お前の山羊を引っ叩いてやる。

コズローフがオスローフに答えて言う。
俺は松の枝をもぎ取って
お前の驢馬をぶっ叩いてやる
敵方の使者にしてやるみたいにな。

お前の頭は雄羊だ、
——お前の頭は雌牛だ。
いざこざはしばらく続き、
流血沙汰で終わった。

まるで枯れた花のように
山羊は雪の中に横たわり、
驢馬は地面に倒れて、
旗のように尻尾を掲げた。

コズローフはオスローフに要求する。
俺の山羊を返せ。
オスローフはコズローフに要求する。
俺の驢馬を生き返らせろ。

おしまい。

裁判官 死の兆候が現前している。
書記官 ほう、現前しています。
裁判官（柔和に） ほうと言っははいけません。
書記官 分かりました、言いませんよう。
裁判官 審理を開始する。
裁こう
審議しよう
座ろう
決めている
——いいえ、罪を犯しておりません。
もう一度 裁こう
審議しよう
座ろう
決めている
——いいえ、罪を犯しておりません。
もう一度 裁こう
審議しよう
座ろう
決めよう
——いいえ、罪を犯しません。

結審。私には全て分かった。アジェリーナ・フランツェーヴナ・シュメツテルリンク、¹¹ 子守りでありながら少女ソーニャ・オストローワを殺害したお前を、絞首刑に処す。

¹¹ 1920年代半ば、ヴヴェジェンスキーはテレンチェフという未来派詩人／演出家の下で働いていた。そのテレンチェフが『ジョルダーノ・ブルーノ』（1924年）という戯曲を書いている。実はこの戯曲の中にシュメツテルリンクという人物が登場する。ただしこのシュメツテルリンクは男であり、また綴りも最後の一文字だけ異なる。とはいえ、彼はジョルダーノ・ブルーノの「頭を切り落とす」のではないかと民衆から恐れられる存在であり、また実際ジョルダーノ・ブルーノの娘を斬殺しようとする。本作とテレンチェフの二

子守り女（叫ぶ） もうお終いだわ。
書記官 ついにお終いだな。お迎えに行くよ。

子守り女が出廷していたことは周知のことだが、コズローフとオスローフに関する遣り取りは、ただ目を逸らすためだけに行われていたのである。

ドアの左手の時計は朝の9時を指している。

第八場 終わり

第3幕 終わり

第4幕 第九場

第九場では、これまでと同様、私の誕生日の六年前ないし今から四十年前に起こった事件が描かれる。¹² 最低でもそれくらいである。だからなぜ誰かが殺されたということを我々が悲しみ、嘆かなければならないのだろう。我々は彼らを誰一人として知らないし、またいづれにしる彼らは皆死んでしまった。第三幕と第四幕の間には数時間が経過している。ぴつたりと閉じられ、綺麗に拭かれ、花で飾りつけされたドアの前には子供たちの一団が佇んでいる。ドアの左手の時計は夜の6時を指している。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） いまに開くよ。いまに開くよ。すごい楽しみ。モミの木がお目見えするよ。

ニーナ・セローフ（8歳の女の子） お前は去年も見てるわよ。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） 見たよ、見た。でも覚えてないんだ。ぼくはまだ小さいんだからね。まだおバカさんだから。

ワーリャ・ペトローフ（17歳の女の子） ああモミの木モミの木。ああモミの木モミの木。ああモミの木モミの木。

ドゥーニャ・シュストローフ（82歳の女の子） ぴよんぴよん飛び跳ねて回ろうかしら。笑っちゃおうかしら。

ヴォロージャ・コマローフ（25歳の男の子） 子守りのお姉さん、ぼくトイレ。

この戯曲において、「斬首」と「娘殺し」というモチーフをシュメッテルリンクが体現していることになる。

¹² 作者ヴヴェージェンスキーの誕生日は1904年11月23日。この戯曲が書かれたのは1938年。つまり、事件が発生した年は1898年に設定されている。

子守りのお姉さん ヴォロージャ、トイレに行きたいなら、私に耳打ちしなさい。そんな
んだと女の子たちを気まずくさせてしまうわ。

ミーシャ・ペストロフ（76歳の男の子） でも女の子たちはトイレに行くの？

子守りのお姉さん 行くわ、行くわよ。

ミーシャ・ペストロフ（76歳の男の子） でもどうやって？ どうやってするの？ お
前もするの？

子守りのお姉さん もちろんよ。私もするわ。

ヴォロージャ・コマロフ（25歳の男の子） ぼくもう行って来ちゃった。すっかりし
たよ。ぼくらが入れるのはもうすぐかな。

ワリーヤ・ペトロワ（17歳の女の子。囁く） 子守りのお姉さん、私も行きたい。ソワ
ソワするわ。

子守りのお姉さん（囁く） 行くふりをしなさい。

ミーシャ・ペストロフ（76歳の男の子） 君らは一体どこへ行くのかな。

女の子たち（コーラス） 皇帝も歩いて行くところへよ。（泣いて、立ち止まる）。

子守りのお姉さん みんな馬鹿ねえ。ピアノを弾きに行くって言えばいいのに。

ペーチャ・ペロフ（1歳の男の子） どうして嘘を教えるの。嘘にどんな意味があるっ
ていうの。そこで皆が何を言っても仕方ない、生きるのはつまらないなあ。

突然ドアが開く。そこに両親が立っている。

プズィリョーフお父さん さあお楽しみだ。できる限りの準備はしたよ。ほらモミの木だ。
これからママの演奏だよ。

プズィリョーフお母さん（勘違いせずにピアノの前に座り、弾きながら歌う）

不意に音楽が鳴り響く

サーベルが花崗岩を突くように。

皆がドアを開ければ

私たちはトヴェリ市に乗り入れる。

トヴェリ市ではなく、ただの広間に、

モミの木で一杯の。

皆が悪意の棘を隠している、

ある者はミツバチのように飛び、

ある者は蝶のように舞う

モミの木の茎の上を、

三番目は暖炉のように、

四番目はチョークのように、¹³

五番目はロウソクをよじ登り、

叫ぶ、そして私はというと、吠える。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） モミの木さん、君に言わなくちやいけないな。君は何て綺麗なんだろう。

ニーナ・セローワ（8歳の女の子） モミの木さん、あなたに教えてあげたいわ。あなたは何て素敵なの。

ワーリャ・ペトロワ（17歳の女の子） ああモミの木モミの木。ああモミの木モミの木。ああモミの木モミの木。

ヴォロージャ・コマローフ（25歳の男の子） モミの木さん、君に伝えたいな。君は何て立派なんだろう。

ミーシャ・ペストローフ（76歳の男の子） 法悦の極み。法悦の極み。法悦の極み。法悦の極み。

ドゥーニャ・シュストローワ（82歳の女の子） どうやって歯を。どうやって歯を。どうやって歯を。どうやって歯を。

プズィリョーフお父さん 皆に喜んでもらえてとてもうれしいよ。ソーニャが亡くなってとても悲しいよ。皆が悲しくて、悲しいよ。

プズィリョーフお母さん（歌う）

A o u e i i a

B G R T

（歌を続けられず泣く）。

ヴォロージャ・コマローフ（25歳の男の子。母の耳越しに自分のこめかみを撃つ） ママ、泣かないで。笑ってよ。ほらぼくピストル自殺したよ。

プズィリョーフお母さん（歌う） そうね、あなたの陽気な気分には水を差したりしないわ。陽気にやりましょう。でもやっぱり可哀想、可哀想なソーニャ。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） 大丈夫、大丈夫だよママ。人生はあつという間に過ぎてゆくよ。もうすぐ皆死ぬよ。

プズィリョーフお母さん ペーチャ、あんたふざけてるのね。何を言ってるの？

プズィリョーフお父さん どうやらふざけてはいないようだな。ヴォロージャ・コマローフはもう死んだよ。

プズィリョーフお母さん 本当に死んだの。

プズィリョーフお父さん ああ、もちろんだ。彼はピストル自殺したんだからね。

¹³ ヴヴェジェンスキーのよく用いる手法なのだが、彼は音の似た単語を連続して並べてゆき、次第にそれらを文脈的に無意味な言葉の羅列にしてしまう。原文では、「ミツバチ」「蝶」「莖」「暖炉」「チョーク」という単語の音の響きがそれぞれ似通っている。

ドゥーニャ・シュストローワ（82歳の女の子） 私も死ぬところよ、椅子に座りながらね。

プズィリョーフお母さん あの子は何を言ってるの。

ミーシャ・ペストローフ（76歳の男の子） 長生きしたかったな。長生きできない。死んだ。

子守りのお姉さん 子供の病気、子供の病気。一体いつになったらお前たちに打ち勝つことを学べるのかしらね。（死んでゆく）。

ニーナ・セローワ（8歳の女の子。泣く） お姉ちゃん、お姉ちゃん、どうしたの。なんであなたのお鼻はそんなにとんがっているの。

ペーチャ・ペローフ（1歳の男の子） 鼻はとんがっている。それでもやっぱりナイフやカミソリの方がもっと鋭いさ。

プズィリョーフお父さん 私たちのところにはまだ二人の幼い子供たちが残っている。ペーチャとニーナだ。もう仕方ない、私たちは何とかして生き延びよう。

プズィリョーフお母さん そんなの慰めにならないわ。何かしら、窓の向こうにあるのは太陽じゃない？

プズィリョーフお父さん 一体どこから太陽が出てくるんだ。今は夜だぞ。モミの木の灯りを消そう。

ペーチャ・ペローフ 死にたくてたまらないよ。単なる情熱。死ぬよ。死ぬよ。はい死んだ。

ニーナ・セローワ 私も。ああモミの木モミの木。ああモミの木モミの木。ああモミの木。さあこれでおしまい。死んだ。

プズィリョーフお父さん 二人とも死んでしまった。樵のフォードルは勉強してラテン語の先生になっただろう。どうしたんだろう。心臓がズキズキするようだ。何も見えない。死ぬ。

プズィリョーフお母さん あなた何を言ってるの。ほら見なさい、あの人は平民出だけど、自分の望みを叶えたのよ。ああ、私たちのクリスマスは何て悲しいんでしょう。（倒れて、死んでゆく）。

第九場 終わり。それと共に第4幕が終わり。それと共に芝居が全て終わり。

ドアの左手の時計は夜の7時を指している。

(1938年)